

子どもたちの生きようとするパワー

<大人に混じって対等に商売をする>

中能孝則

売る物は持たないが物乞いとは違う

この活動中いろいろな場所で、物乞いをする人たちと出会ったが、手足に障害を持っている大人や高齢者が中心で、子どもたちが物乞いをする姿にはあまり出会わなかった。訪問する場所によっても多少違うのでいちがいに言えないと思う。

さて、お釈迦様をお祭りしてある『うどん山』（庶民の避暑地でもある）に登っているとき、後ろから涼しい風がふいて来るのでふと振り返ると、椰子の葉でできた団扇で私を扇ぎつつ、後をついてくる上半身裸の男の子がいました。

私はたまたまだろうと思い、サンキューの一言で済ませたが、ずっとついてくるのである。

周りを見渡せばほかの数人の団員も同じ情景であった。頼まれたわけではないが仕事をしているのである。私たちが立ち止まれば同じように立ち止まって扇ぎ、歩き出せばまた歩きながら扇ぐのである。



私は途中でわずかなお金を出し、その場で断ったが、中には最後まで付き合ってもらい、

子どもたちにとっては充分なお礼をもらい喜んでいる子もいました。



姉妹で役割分担

シアヌークビルという海辺の町で、海水浴場の砂浜を歩いていると、手作りの装飾品をいっぱい詰めた籠を片手に、「どれでも2個1ドルお姉さんかわい。お兄さんかっこいい」といいながら私たちの周りに笑顔で近づいて来る。(この言葉は誰が教えたのだろう)

どれどれと覗こうものなら、あちらからもこちらからもこの手の子どもたちが湧き出してくる。

特に写真の姉妹の販売技術には驚いた。私もつい覗いてみると、色とりどりの小さな木片をつなげたプレスレット、素朴できれいである。そこで、3個1ドルではどうかと交渉してみた。背の高い真ん中のTシャツの子は困った顔をしながら、一時は仕方ないかと言う顔をした、が、その瞬間顔の前で右手を横に振りながら、「だめだめ2個1ドル」と赤いポシエットの子が、笑顔で声をかけて割

り込んできた。「あんた誰」・・・「私マネージャー」と流暢な英語で答えてきた。そして『私たち姉妹』とのことであった。

このコンビネーションに思わず笑いながら3セット購入してお金を払うと、手が出てきたのは妹の方で、すぐに赤いポシェットにしまいこんだ。

気の優しいような笑顔のお姉さんが販売係、いかにもしっかりしていそうな笑顔の妹がマネージャー兼会計係である。

この子どもたちの生き方に完敗であった。
(事後談)

プノンペンに戻りマーケットに行った時に、きちんとした店で同じプレスレットを見つけた。そこで、ハウマッチ、すると2個1ドルとのこと。団員数人で入れ替わり交渉したが、2個1ドル以下に下がることはなかった。

判官びいきかもしれないが、笑顔の少女たちから買えてよかった。

ジャックフルーツはいかがですか

ジャックフルーツは一見白菜の白い部分を黄色に着色したような感じの果物であるが、これが実に美味しく、期間中よく食べた。このジャックフルーツを販売に来た女の子がいた。1袋1ドル、一日に何個売れるのだろうか。学校へは行っているのだろうか。

私の心配をよそに黙々と売り歩く。そして、



私に向かって写真を撮ってくれと行ってきた。写したとしても渡せるわけではないが、せめてと写った写真を見せてあげた。

「理屈などどうでも良い、生きるために働いているんだ」と訴えてきている感じがした。今私たちの日本で失いかけている何かを気づかせてもらったような気がした。



そして、団員とも一緒に撮らせてもらった1枚、この笑顔である。

自分を取り巻く環境のせいにして逃げているのである。とにかく今を必死で生きている子どもたちを応援したくなるのは間違いだろうか。

いつかは必ず自分たちの努力でVを掴むぞと訴えている感じもした。

瞳の先に

このような場所での販売方法は、ほとんどの子どもたちが一人の客に寄り添って買ってもらうまで粘るスタイルである。

その中でこの娘は周りをずーと見つめていた。両手に下げた、パイナップルを買ってくれそうな客を探しているのである。

自分の洞察力と直感を信じて見つめ続けている感じがした。そして、さっと近寄り見事に販売。

私たちには、このような感覚も薄れがちではないだろうか。



バスの出発直前まで交渉

休憩時間中結構な買い物をしたように思いバスに帰ってくると、そこにもまたパイナップルの商売人がいた。

そして、動きだそうとしているバスの外から、まだ販売しようとする姿もあった。私は立ち止まって「うーん」とひとこと。



こちら竹筒餅

竹の筒に少し味のついたもち米と豆類を入れて、蒸したお菓子とのこと、お世辞にも美味しいと言える味ではなかったが、ほのかな甘みと竹の香りがしみ込んでいた。

腹持ちはよさそうだった、竹の持つ殺菌作用で昔は保存食として重宝していたとのことであった。

また、売っている人によって微妙に味が違うとのこと、その家に伝わる食文化を商売にしているのではないだろうか。

とにかくたくましい。

